

学位論文内容抄録

論文題目

「加齢黄斑変性症に対するトリアムシノロン後部テノン嚢下注併用光線力学療法の治療効果」

指導(紹介)教授： 山下 英俊

申請者氏名： 斉藤 公子

背景：滲出型加齢黄斑変性 (age-related macular degeneration, AMD) は高齢者の黄斑に生じる脈絡膜由来の新生血管が伸展し、高度の視力低下を生じる疾患である。先進国における高齢者の失明原因として重要な疾患である。AMD に対する治療法として 1990 年代に光線力学療法 (photo-dynamic therapy, PDT) が登場し世界的に行われている。PDT は従来のレーザー光凝固に比べ網膜への侵襲が少なく、周囲の正常網膜への侵襲を最小限にとどめながら新生血管の活動性を抑える点で優れている。しかし PDT により一度閉塞した新生血管は最疎通し複数回の治療が必要となる場合が多く、単独療法としての PDT には限界がある。そのため PDT の効果を高めるために抗炎症、抗血管新生作用を持つトリアムシノロンを併用し、治療効果をより長くさせることが行われている。

目的：トリアムシノロン併用 PDT が PDT 単独治療に比べて再治療 (再発) 予防および、視力維持に関連があるかについて検討する。

方法：診療録検索による後ろ向き研究で 2004 年 7 月から 2007 年 5 月までに PDT 単独、あるいは併用 PDT を施行された滲出型加齢黄斑変性患者 111 人について調査した。対象患者の年齢、性別、治療前視力、治療後視力 (原則 3 ヶ月後ごと)、術前病変サイズ、蛍光眼底造影検査およびインドシアニングリーン蛍光眼底造影検査での病型判定、および治療効果の評価、副作用の有無につき検索した。視力悪化 (logMAR 換算視力にて 0.3 以上の視力低下と定義) および再治療までの期間を、Kaplan-Meier 法を用い生命表、生存曲線で比較し、また予後因子につき Cox 比例ハザードモデルにて解析した。また狭義 AMD とポリープ状脈絡膜血管症 (polypoidal choroidal vasculopathy, PCV) の 2 つの臨床病型につき層別解析を行った。

結果：再治療までの期間に関して、併用治療群は単独群に比べ再治療までの期間が長く (ハザード比 0.59、95%信頼区間：0.36-0.99)、再治療のリスクを抑えることが示された。病型別に層別解析すると狭義 AMD 患者でのみ併用治療が再治療の必要を抑える効果が認められ、PCV 患者では再治療を抑える効果について統計学的に有意な差は認められなかった。視力悪化までの期間に関し 2 群間で統計学的有意差は認められなかった。視力悪化には高齢と術前視力が悪いことが有意に関連していた。

結論：トリアムシノロン併用 PDT は狭義 AMD 患者において再治療を抑制したが、PCV ではこのような関連は認められなかった。単独治療に比べて併用治療での視力維持効果に関する有意な関連は認められなかった。本研究は AMD 治療において臨床病型に合わせて最適な治療法を選択する上での重要な因子を明らかにすることができた。

平成 22 年 8 月 30 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 齊藤 公子

論文題目： The treatment effect of combined sub-Tenon injection of triamcinolone acetonide and photodynamic therapy in Japanese patients with age-related macular degeneration

審査委員：主審査委員

本山 第一



副審査委員

加藤 丈夫



副審査委員

佐藤 慎哉



審査終了日：平成 22 年 8 月 23 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

加齢黄斑変性症 (age-related macular degeneration : AMD)、特に滲出型 AMD は黄斑部に生じる脈絡膜由来の血管の異常新生をその本態とする疾患で、高齢者の失明の原因疾患として重要な位置を占めている。この疾患に対する治療には様々な方法が試みられてきたが、多数例を長期間観察してその成績を評価したものはこれまでなかった。齊藤公子さんは、光線力学療法 (photodynamic therapy : PDT) と PDT にテノン嚢下にステロイド剤であるトリアムシノロン注入を併用した療法との比較研究を行った。対象となる滲出型 AMD 患者を、典型的滲出型 AMD 61 例、日本人に多い特殊型滲出型 AMD のポリープ状脈絡膜血管症 (polypoidal choroidal vasculopathy : PCV) 50 例に分け、初回治療後 32 ヶ月追跡調査した。その結果、典型的滲出型 AMD においては、PDT 単独療法と比べてテノン嚢下ステロイド注入併用療法が再治療を有意に抑える効果があることを見出した。本研究は、AMD 治療において臨床病型に合わせて最適な治療法を選ぶという新たな道を開くものであり、審査委員会では博士 (医学) 論文に値する内容であると判断した。